淡路国
淡編

執着譚

二

へ13
3147
2

特
へ13
3147
2
笛巻

浅間嶽面影草紙後帙

二

逢州執着譚　　笛巻

種彦著

第三

瞿麦の方深夜に時鳥を殺害すること
男波乃笛鬼火に順て発さる事

夫苦楽得失は惑によつて生じ。生死禍福は天の主ることろなり。敢て言べ
ども。愚なる眼よりうかがふときは幸あるとき幸なきは人乃善悪によらざるに似
たれど。邪にして楽むは極の火乃ごく。一旦熾なりしとて清ふるもの。なほ
正しくして苦しむは泥砂に濁水のごし。因式ばいとぐの原乃清きがごと
ごとく。さても陸奥牡鹿郡。浅間巳之亟が館にあり。何なる者ゝ側室
時多を殺害せしとつたへ彼妬婦瞿麦が所為なり。詳にその縁由を問巳之亟

皇都守護に出むきてより。弘誓まふる者ふけまで。曙麦が猥ゐる行跡日頃に添
増花乃晨月の夕べ。又夕。日夜酒宴遊興に耽り。自ら居高楼に。琴
鼓弓の音の絶るときなく。或々仏法にかよる。漫行まぐ〳〵ゐるに。老白雪校
尉徳太と云る者。公卿をかゝ〳〵で出ふ。折ふれ諫めせて。露美川の御乳色
ふく。妾ひとりの朝臣師良が女子。妾ありてまそ。夫良治上乃れんがく目出
〳〵きにかどりの遊楽にいつぐくるしかるべきと。修ふ罵しり。公行ぢけし侍女
のく傍に出しめ。そ乃余の人にも絶て対面しめず。己随意遊び狂ひ。ふを
視きく者。公卿も公ふきと。代と人何ふるとやいでるゐ〳〵と。諸に附聽
あつりとふん

○作者種彦伏告

代一條ハ巳〳〵亟。皇都に出むきて〳〵あくに。却く陸奥ゐる舘乃る

を説いづれも一巻にて。花街乃説話より前ゐ。前後二編と合て
こゆふとき。前編ハ回巴〳〵亟再度皇都に旅ごろとつゝとゝに。
代條を次ぐ。因下丹後編後端と除。後帙一巻を読めば。ゐを
出乃ひざゐれど。源語に竪行横行あるゞど。代巻半ばそ時ゐ存
命のうちゐ。夫乃〳〵〳〵のひ祢
かくて後浅間家乃奶々曜麦乃方ハ牧山の長福寺ゐりける。遠山尼公のれ墓て
詣んとそこちいでゐひけるゐ最ゐ。ふゐに物好ゐ本性ゐれば侍女半女に
いつるまで。花と折紅葉を車〳〵綺羅ハ散のこり。花も恥るゐり粧ひつ。
北上川乃わとうまで練いでね。時ハ夏乃ちゐめゐれば。あさ緑ゐるその乳
色いとう。飛ひてうゝゐ乃ゐゐめに異ゐ〳〵で。ちゐれてにわふ桜花西び
音にゐく時ゐ。ちゐゐ十洲三島夢中に在とゐる。遊仙乃枕に眠ゐち

ふ。眼にふるさとぶる奥ぶかさのいろりけり。武野の則遠山尼公つまぞかりしとき。
仏まつりで乃乃ゆきぶりに終日桜がり。角係牡丹花に琴歌弓を合奏せさせ
ゆひ。袖の波うちくく。相模が○くちのくく乃袖のくろの波川公のうちに流き
てぞとも。と詠じてるふるさを呼ふり。さそて瞿麦の方丁に暫く逍遥して。牧
山乃かくふ刻れとちまつきに形宴しき四方髪乃男也て瞿麦の方に告
ぶさことあり。扨それ亀もふくかる要に迫づきけまで。扈従乃侍さち隅う。
奴くにさこ人ちまるとあ。ぶ雑にきさろ。それくの人にはつくこそ去べれ。
汝ぞき賤しき死れのそ近側にちつぶ曲どふぶ。疾ぞれよく息さく
折ふ。やよ侍ぞっさるいひそ。其者に対面ぶべ。宜ぶとるに侍原乃由孫
いちくぞとつ。ども。畏ゆと應くひくう。ときに矯ふ乃戸をちづやにひき
のけさそ翁さ。掛頭さち出ふ。扨姿のまぶぞとはげいく。ひとりも紫うと

扨れさるぐ乃ふのく花やを蒲ぶるふまるの裾ぶちてみた。
寄南乃香さとものれてうつくしくうち笑ひる面ぞ看のかりの紫ぶる人
ぶ天ふ。美乃仙とのひ。紀金若百済川成ふとも乃糸ひをいぞ宮
沢ん鳴呼扨そるべ。かく顔色花乃ぞくにく。却て公の荊棘を隠せりさて傍
ハ三五人乃侍女を拭。其余の従者ハ声乃とぞくまぞに遠ざけ近くきさるべ
と徒男をまう行さるひぬ是何等者ぞと問ふ往年農人奈古平に方人して。
修行者に打扮忘貝寄居虫乃姉妹を惑ひせる鈍平太とい者ぶ。近曽
野夫醫を業とく四方髪ふり。鈍玄と名をひかへる愚者ハ鈍玄声を
ひきくふ。日外此者に対面せ。年ふる蚕乃生血にて調合ふ。毒茅さい
かけ傍を顧ハ瞿麦微笑ふ。さる。そて従者ハ悉く遠ざけ妾ぶ公の底
をとうくとれる侍女のと側に伺れ。ぶめて悩とふれと仰とるに鈍玄ぶ

ゆちかくいひけるさは秋七十人月こる宴に時をる乃方ゑまを花さきあひ酒を
合〻く彼茶を喫ちゐ〻れ〻験あり〻く。其夜より悪瘡と変し斉藤
より詳に世ゐり変ゐりしうへ賞金をあ〻くべき。證文まで与へあひ音信ゐきこ
不審ゐりと問ゐ〻ば瞿麦曰妾も疾ゐうその変ゐにかりつまづ折ゐくてゐ
ゐ中ぐ〻ゐ妾ゐ女ゐ千重乃うちゐ〻ゐ金乃色ゐりいで〻彼に与へよと宮こに
より。鈍玄いよく〻矣壺にゐり彼毒茶を解に日ふ三度浄水に刀をうたせ
ゐ氏ゐ乃茶を服ゐるとき〻ゐ頓に斉癒平愈て原乃姿とゐるとゐ我家法
乃秘中の秘ゐり。粗〻く氏紙に写ゐうて證文にうそ〻く。右乃ゐにさ巳
尤に賞金をうけゐさゐゐぬ瞿麦又曰呼淫死を待べき時をるが奇病平愈
ゐき良毒乃法に益ゐ〻といへども又自来用るとき〻いろもめ〻ん失に老まれ
妖窶ゐたき姿に〻数多乃賞金をもち人に視とゐめられそ従者の居ぐる

方ゐそゐ氏方乃ゐ逆ゐり疾ゐと往ぬと中へ〻ゐ紙ゐと巻て僅に
ゐ〻ゐも折はと瞿麦懐剣ゐきゐゐ〻ゐ紙玄目ゐけ打ゐけるゐ的ゐづまそ
頂ゐり因ゐりまそぐゐとゐり一声叫ぶく息ゐ〻ゐり侍女ども大ゐ驚ゐき
何乃恨ゐりてゐ純玄を出ゐけられ〻と訪ゐやよ音ゐ人や中へ階ゐ
ゐそと押角ゐちづに冷ゐいゐ〻く〻ゐるく〻と死殿の側に走ゐりゐ
く懐剣ゐきゐ〻く半湾月と雲乃ま猫に中〻逆〻彼原来妾に孫ゐく。
又時ゐに恨ゐ巳口賞金ゐ管ゐと中へ一旦方人ゐゐ〻ゐ〻ども妾にゐ〻ゐ
賞金をゐ与ゐる者ゐるゐきゐに人彼ゐ口ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ
ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻

何といへさまざまとあるを時に五色の美や山上より一国乃隍火消こと烘めの
瞿麦乃不ときを表只の忽然とくく斑なる犬と化し衢に泥吉より戻しこる
遍文瞿麦の懐中より忽ち散さるを見ふ哑何方ともなく流せけり瞿麦の
るるとうち和ごろきあるふ口惜か乃盜出おぢろげにてふらつきごめを絶
ぬいりと悔と甲斐なく兎角のを間に見へ申上刎ばかりとなり風が伏師野
寺乃鐘と暮ちるきに武見へ長福寺ふ法でのうと丞に敏に飯と又例乃酒
宴を催し侍女どもをあつめく歌つ舞つ戯び興じあひける○異へ扱ひ変
又良治ぶ側室時もふさる年乃秋瞿麦乃方にまゐられ月ふ延に連てり。
さと窈窕なり顔色忽地悪瘡乃ことあに中ぶれ生すつる片羽とも成
ふるを洒一花風に嫌うまく柳江の瀬孫乃変いづちにやきくゆきけん絶て
昔乃人とふ乃人ど良治皇都に旅ごちくとりへ刑敷にひきを蕩り蝴蝶舞

振といへ特制乳ふる女帝五両人のく傍に他人いへ面をあくみこゆるこをこ人
狂ひへど其昔良治ぶ寵愛ふ殊に公ごと正しきふ老臣ともく知る
が故にさるべくふいひ慰め醫療をあるを表しけまぶ閉くふ沈とふくしく
とのへども彼悪瘡ふ蟇乃生血とも調ごてる鴆毒のふとこまろにて
風寒暑湿乃外ふれば神丹華陀ぶ術も表ひ日ひく甲りふ効ゆくふ
かくてふ存命とも何ふせんと半熟死も中ごろる憂力をかこち歎のりと
枝さへそへ甲斐ふきを文のくいひつけ夢乃甲りふ甲りく疾ふくへ法ふ外
乃所在ふりふく安にはいて私に甲りひくく自一旦良治に寵せられてり。
涼窓に在て遠羅を才に徘ふ幽閑に伏て蘭麝を表ふ美しせるもく
幸あるに似つれど不意奇病に苦くかくばごろくしき顔色と変ぜる
へとぎやるかさ乃報にやあへん嗚呼天地八万物乃逆旅光陰八百代乃

客自化生ど〜生はるめやある。錦浦乃荘も冥途の境に為ふく。珠玉の宝財も閻王乃宮に入何らせん。頻に菩提心を發し。旦夕念珠を爪操唱名文に於こゝろざす。ちうつ〜より後わ蕙園の花とゆゑて如来妙色身を観じ。紅園の月に臨くわ一切法常住を悟し。さるゆゑ門乃ぶくをは殊勝にも入あれ。ありけりかくてある夜雨ちるに降いぞければ時を経かさゆくとゝろどもかりに法ぐけ。一人寝もゆゑ。例乃ぶく赤珠つまゞ〜く在〜けるぶ。程もなれしる楼に入。瞿麦が枝びとかがしくて琴の音乃いと細うきまゝ〜けまゝ。流石ふ姫やありけん耳を欹てつゝ涙ぐゝいけるに入ふ。蝴蝶の舞振よ月ぐ舘にあり。其方ふ妾に扈従そゝるもく。片時乃暇もふく。あれあのぶく移び典ぐる徐余所ふ歩ゆ。さぞ於こゝろきゝ公に入傾美と於ゝべ〜。自ら憂労に比て宜べ。二人乃女童ハ〜ち泣つ。ちゝ今わしき仰けぞけるぶ。ゆく思ふ側をゝちゝ〜ぐ仕まつ〜ゝる。宿世〜ゝ〜ゝ乃。沛き縁にぞけるべきに。何糸る恩を等閑に於りひ少ん。かるゝに出ゑを労〜ゆぐ。於ん病乃障ふべ〜。吾倩ハ見に付るゝ。ゑ。ゑ隈ゆくもいゑ。ゆ〜と涙於つゝ。二人ハ障子の外にゝぐりゝぞ。ゑ入乃草庵の絵読〜く居りぶ。於ゝゑゆきゝ寝ぎゝるゆきゝ。悲〜むゝちゝ眠を催〜。其ゝ音ゆゆく打臥ぬ時に風ゝゑゆ。燈火屢瞬きゝ。ゝ〜ゝ部かゝる乃音ゝ〜寂寥く。不牛枕方を視れば。怪もむべ〜斑ふる老犬朦朧ゝして かゞまり居れり。原本時ゆゝ男子に耻ざる勇ありゝゝぐゝ。病苦にゆゆ弱りけん。あふ於ゝゝ〜ゝ衣に被て打臥んゝゝふゝゝゝ。彼老犬額づきけゝ。ゝゆ於ゝれ ゆひゝ。我ハ君に仇ゝる者にあ〜ぞ。ゆゝゝんとゝ乃あるに入りて来れ。ゝ〜ゝ声 いゝゝゝ〜人間に異ゆるゝゝゆ。時ゆゝ涙ゆく公を於ゝゝ。和〜起ゆゝり。眈ちゝゆれ

枕刀ばつとうて衣乃間に却〳〵隠し。汝獣刃いくゝりゐぐ。夫に人語をなす。怪しきの甚しきなり。必定怪き由縁あるべし。つゝとあゝぶ疾いく歩んぐるいと宮ゝとき。彼老犬潸然と涙をゐぐし。小子安婆にあり。昔、銑玄といふ醫師あり〳〵。我家に伝る蛇毒あり。酒に和して喫ちもれば忽地悪瘡を発して疥癩と変じ。又彼毒を解くべき製茶二ッ乃奇法を乃つるぶ。式変いつふゝとる漏けん。蹟麦の方きとゝめされ。潔に調合ゐるべし。仰をとゝまり。我食欲ふゝして。何の思慮ゐく美味見に加へるゐ。蕃乃生血を以て。不日に調さゝあげよ。君彼茶を服するぶ故に。ゐるの片羽に似つる姿とゐりゐ。見悉蹟麦が君を妬くゐよりも起〳〵変化へあれど。其罪人乃原いそしがゝみ。ゐるに蹟麦のよう。ゝゐり〳〵上へ賞金をもつるべき證文をよへゐぐ。迚く奇信に。我訝りけ。近曽仏法で乃折をゐぐ北上川いく蹟麦乃方にあひまつゝぜかくゝゆへ

そそまつりに。ゐく賞金をあゝ。ゆきをおゝて脊中ゝ。刀に切て捨られ水乃あれや墓ゐくも黄泉乃思ゝゐり伝る。我泥ゝ謀れつるふれば。人を恨んよ〳〵由縁へゐつざれど。余りに口惜と却ひゝゝる一念又ハ年頃さまぐゝの奸悪を図る報いく。忽地畜生道に堕し。畳乃苦辛を受とゝども。安婆にあり〳〵ときざゐゐ。愚癡ゐり〳〵小子盛ゐる凡夫をつゝぐ苦〳〵むるゝを得たべき。蹟麦がさゐゆゝをゝるゐ。ゝゐつゝ。三途乃巷に艱苦絶る間ゐ。式紙にかゝゝゐ。蛇毒を解を薬方と。賞金を約〳〵る證文ゐ。彼をゐく病氣平愈の期を催〳〵。是をゐく證據と。九分と我が讐敵〳〵る蹟麦を討ゐ。地獄乃苦患を助てゐ。仇を恩ゐる報をゐけんぞとく。悲〳〵き姿にそまゝ人まりゆゝで。後悔の涙ゐきゐり。嚮にゐ時ゐハ黙ゝと〳〵ゆゝゐるぶ。怒ゐゐ怒ゐ怒つ。ゐつくゝと立ゝくゝひけゐ。扨ハ我奇病ゐふれが呼ゐゐくゐり

けるゝ五位妬〜とそ。寵を手ふへるべく女乃常にはめんど。毒薬をのく顔色を変ぜさせ。扨のれ権勢をとゝ〜んとゝるゝ。武家乃妻にハ似氣ゝく。比奥示練の行跡かゝ人に報ハゝりゝ〜ゝ。今ふやゝひ知〜せんど。我ハ唯宿世の悪業報きく〜。疥癩とゝ〜〜とそ〜〜ゝ。ゝ〜〜〜せ〜〜〜と且夕ゝ祈〜四仏読〜る経文ゝまゝ何ふゝ白露乃玉と嫌く水晶乃珠数担切てゝ〜〜〜投きて。障子さと押ひけべ月を隈ふく〜〜〜〜。翠簾かけて色る桜にゝ〜〜〜〜

柳亭
種彦代案
女合法楽ひめごとくのひかり
辻講美鶯囀反言葉数取
古居清峯画
ふうぐくきちたくひめとこいさ
おかめ京一番娘羽子板
柳川重信画
清川ひめさとすがたいさき
文七梅桜振袖日記
歌川国丸画
是等合巻ごろいろる清半紙之逸品
賣出しはいい求い逸てきれ

鈍玄商生道に陸ー
総を時多に
うさふ

露選びて式時胡蝶舞振乃両人に次の間にわろく時多るが目覚さるを知。何
ぞ不ふまつ事ぞと帝襖のもとそ開ければ都より影乃漏くるにく月の明とーやを忘
れどと立いでゝとりとひとーらく何氣なき体ふく其夜に打臥時多るに見るひ
らく。夢に天魔乃男ひにくく信じかくるこゝとも。芝にも人ふを捨られかくあや
乃姿ふりとくつまでゝ居るべき。若し紫毒とそりと。死とも更に恨ふに先服薬
しそ公ゝふまじと。即時に醫師に作とく調合ふさーめ。庭にはゝ水をひきさる
掛樋を作らせ。日夕ふをそぎふどーく。徳く多に得つる薬法のごとく。ふの洗ら
さで療養ふらーーぶれば。奇ふる哉雪とー肌を埋る悪瘡ふ漸に愈姿の
花と原乃夷にあくるとなるとふりぬさて曜麦の方に乃よーー伝ふるひ私に存る
きえもく時多るが奇病に墓の生血にく調合ふせ。毒薬にとりとくふきとだ。
ふーくく乃薬にとくーー治ふべき謂ふ。殊に掛樋乃水に対をとーきるるよ。彼銘

ふるひつる処に一点乃星ふに。若彼薬方時多るが入べきるぞこゝにに我対の
ぴーきえ夷さるべ。安閑と日を送る処に。彼書簡をもく良深に告
ぶるさきふ寧殺害ーく後雑を除べ。彼ーふ力量あるにさせよ。病に労
ーふれば何程乃とろゝーんとふうふづきさゝる夜時多るが閨房ちるき前
栽乃村行にかくろひるるが。時に五月乃初ふれべこるくる。柳乃梢青然
まで羊次ーく高根ふろーふ河多めきてる霊ひきーく千牛乃星の影暗く
天ふ園のうちふかりふ。亀疎野ちの乃ふ持て。夜を森くと深にてるを
折ふーくちそーふ流石ふ胸に東の橋を渡ふーくとちひーふ頓にふーくちも
ーくく先板塀にのぞ。障子乃疎ーくさー歌べ時多るに只一人孤燈に向て書を
ひーきさーに余念ふき光景にく別ふ人ふがーくまにてーくど折ーも散残り
さる外乃花頭ーく蝴蝶三ツ四ツ飛そ。燈火乃光を慕ーくおびく。障子つき

て莫を分ケ〳〵閉くを。是屋敷ゆりと已に黛乃かげかくろひ晩をのゝ〳〵和ら
障子ゝ〳〵さわらんが殺胡蝶ハ〳〵と嬉麦元に花いろ〳〵ゆ〳〵ゆ風に頭。
焼火ひゆめ〳〵ひん内ハ爲羽玉乃暗ゝゝ〳〵ゆ原来時分ハ侍女〳〵の勞を
厭夜ハ遠く寝ゝゝ側ハ舞振蝴蝶の童乃外人妻ゆきふ障子ゝゝゆき
しへ〳〵ゆ若盛人ゆゝの戯をかゝ〳〵に来るにやめ〳〵ゝゝ〳〵
乃るに袖ゝちかゞ〳〵ゝ傾程る女めりまづ心みちわ〳〵。誰や無益障子ひ〳〵き
故ゆ情ゝ焼火に焦て死ゝ。妾に不意殺生乃罪百せ尚るゞ憎さよ。何の為
ゝ其処ゝ思ひわるゞ〳〵立ゝる処を瞿麦ハ難にゝゆく抜さゝ〳〵肩元四五
寸切さげゝ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆきゝゝ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ尾居ゝ撞と倒ま臥又ゝゝ〳〵ゆ〳〵を
時〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゆ

月は落れど星乃光れを見視て。こゝ人〳〵ぞ手ひしぐけじめにもいとゞ。痛痍
いや弱りけん時多い只退きがらいて。紫英花乃咲滿し泉水を平地とまろへ。
片足水にぬらいつゝ。曜麦はよとゝろぬとも拔び。落る懷刄拾い上起るを
る時多ぶ左乃腕を切て落。呵と叫ぶ多もあ〳〵せど。胸さうこゝ〳〵白刄を
脇ふてきつけ。いまの助いふぞと問ぬ。時多はやゝ命と共ひあさ〳〵め爰
にいるびれ〳〵乳色ゝ。微笑て右乃手をさ〳〵と。武をさ〳〵君が珊瑚の枕と
換武指をもく〳〵ぬいで過に〳〵夜半を数衣を拔ひ脊をうち撫愈て左りい
憎〳〵武をにぬり。いぶく右乃多をも切て〳〵ひりにまぬとゝいふに。ちぶとき女も
といひさゝ切て拔とも。時多は無念骨に銘刻。ぬまぐ死をやどいと苦〳〵げ
ゝる声をいぶ。妾が姿は辰りくうるかさゝを勝ふと。君乃戯れ〳〵ひとゝある。
ち武も切ぬと。脊中を曜麦が方にさ〳〵向撞と倒く。遂に息絶死うせけ。あゝ

武指はと。光骸を池乃汀ふ跳あと立さ〳〵んとする折〳〵も。胡悌舞振乃。女童を
武拘青に若きさく漸く起出曜麦が裾にとぶりつき。何人〳〵ぞと時多は方
を殺〳〵ぞ。疾いそ〳〵ひぬ〳〵とゝぶ〳〵礼と。松ふ嵐岩こゝを波乃音にまぎれく。
ちぶ〳〵〳〵もゆ〳〵ぞ。曜麦は人や世ちんとゝしろめゝ〳〵。側を顧つ。まづ多を
のぞ〳〵く舞振が衣かい捌。ぞ一刀に切て捨。あゝやと若〳〵胡悌をとつて膝
ひつ捕狗りとをさ〳〵通せば鮮血さつと潰り。汀ふひ〳〵き紫英花にかゝると
ゝ〳〵つるが紫変〳〵かゝ紅不思美や紫色乃陰火と化。床にかゞり留に
声あゝとさゝふぶ〳〵人乃ふきふ〳〵そに異ふ〳〵ぞ。ゝる〳〵陰火は三周とふり。
彼留りゝとゝ南の方〳〵飛去りけるかゝる怪異を視てさ〳〵。曜麦天に惶色ゝく。
又さら去んとふ〳〵ける処ゝ。程離て直病ゝさる侍女ども。今胡悌が呼ぶ声の世
〳〵と若〳〵追に出来にぞ。乃つけられ〳〵と懐刄ゝちゝ。持る雪羽右左りに

切く落し袖をかざして廊架づたひに逃さうける扱侍女どもへ時多の方へ
させるゝぞとて大に怒る。頓て池乃汀ふく。蝴蝶ゞ死殿につまづきたふるゝ
くのとゝもぞと。家隷老臣を與合。庭の隈を残る所ふく擇りに求ど時多
が死殿へ池乃に引ずられて。人丈ばかり生のび。菖蒲乃ふかうかれて。頓に人へ
ど天明て浸ふく擇いざせ〜ど憐ぶ〜昨夜流て〜黒髪を池乃玉藻とゞれ
ゐ雪辱き雙乃手へ右左に切ぬとされ。るもつぶせき亡殿にとり携て侍女
どもゝ悲悲〜とく泣さきふ雪夜小織く助丈に對ひ時多の西方へ日頃より侍女へ
も寢所近くに居〜るゝ。我さへふもよろ〜さるゝ〜にかゝる凶変さいでゝる
ゐ〜ゝが是ゝ言ても詮なし。何ゝ鬼まれ主君乃寵愛浅かゝざる側室を人知
らど殺害せ〜れ。ぬまゝに捨ぬきが亡直宿の侍女をもてめ。命明に詮矣を
ぐべ〜とゝ〜けきゞ。水魚太頭を。ず。否〜我ゝふ子細あれば。ぬ一度へ深く秘し。

人に語るゝふれとゝひさしけるに流石ふ老乃ゝぐとゝひ一宮浮き調めゝべ
ゝく。其意に隨ひぬと人にゝ〜を貴〜曲ぐゝるべと侍女ゞゝふいひゝさを瞿麦
乃方にゝさ。時多ゝ病ゝ〜ゝ。死去ぬゝきまゝ人けをゞ瞿麦の方へうち捨きゝ
体にゝるゝ〜ゝ〜ゝひけるゝ。ゝ〜雪枝孫ゝ太。時多ゝを殺害せ〜罪人を糺さゞ。
瞿麦ゞ呼ゝ為ゝを推し。血で血を洗ふ世乃誹を憚てゝ為ゝべ〜かゝて時多ゝが亡殿へ
浅間家の菩提所長福寺へ葬ゝ。葬實結枯信女と法号ゝこゝ。夫へ集徑に。
若へ仆若へ嵩。實ゝ為ゝに扱ゝて則枯又仕螺異譯孝螺へ死ゝて無亡と説ゝ。
既に良治四ゝ在〜刻ゝ時多へけ〜きゞ〜〜〜〜人けきゞ戦に奇病をゝみ
て其〜ゝ〜ゝ今法号に其音ゝをゝむも。異又奇とゝ〜べ〜。ゝそゝ時多ゝ非
今に死ゝるゝゞゝも良治公に告ゝ人と小織ゝ助其後に完らゝ時多ゝが位牌を
ゞ戒重ゝ乃箱に扱ゝ。既ゝ用意調ひけきゞ。又少ゝ天ゝ病めゝるゝよきゝ

保養のため本国近江よりこち越んと。瞿麦乃がに頼ひ其とゆるされければ小織の助へうち連て旅立ち。往ふく近江路にかゝりぬ。こゝに小織太ひけるは。我も頃て皇都にのぼり君乃仇敵をうちぐんどゝるわいざ汝へ暫く彼地にとゞまり。君に扈従し。忠義をつくすべし。勢田乃橋よりこゝを離れ小織の助へ良治ゞ旅館をいとまして急ぎける

小織のもとに良治ゞ旅館にてうせの夜良治ゞ花街に漫行ありしへ一巻にて合せて見るべし

第四

時多乃亡霊種々の奇怪をあらはす事

瞿麦狂死まぼろしきぬの事

瞿麦はもふ仇に時多を弄殺とふ。頃日乃怨一時に晴しうど若は註美男の人に却ぶべきいろふてる分説と安きゝるあらざり。唯病事りて時多は死去ぬとひゝ。絶〻其沙汰にやうゞど扨へ我呼為と知者のしを

く。月見る宴をもよりけるところがまへ人拂もとゝろ。殊に其夜は天と一乃雲なし。月やのぐとう登りければ瞿麦晴乃方に端居して酒宴を催し。詩を賦〻歌を詠。夜もふ〻深酒もそゞりに成ける時侍女乃言けるは君去年乃今宵は時多を伴れて吾們さへ集会るさまぐに辞めしてやとく奥へ入りしぶ其人なくて却〻ぶ〻ときこゆれば又一人が曰。それは田舎同者乃順礼乃唄なんとてあの乃水盤の柄杓ならさりこは妾乃ありし時多るゝがゆゑ又弄ア〻ぶ〻ひの〻〻声乃うちに。水盤より一固乃陰火飛いで。石如帰ふ返と帰てゝ時にもあらぬ何ゆゑ〻〻〻〻と知かに成ぬ月俄に朦朧そして。風瑟〻とゆきさり。何とやうん

蕭然たる永を溥たるに己が後を かつて。何よりきさらをひさぎと
つ面ずつ多く瞿曇も怪しと知りぬ。ぞ。めつゝ風情にて微笑つ。彼ぶまづ
ハ和ちゝじどとも妾ハはるゝ乃代に琴一面調べ。誰はとよと琴二面をうち出
さセるゝハ異も時ゝを襲ひし松風し滝乃糸ゑ。琴の名琴も妾さに今青隈
ひ。代二面をうしぐゞセーん。ぞゝ〳〵どおりゝど。住とゞゑう。親に排しる萩乃素
いて猫ゝちんちー。ゑうかさゑゝをに絶て音ハいでゆゝどゝゝ不思議ゑりと。
琴とり替又二面を調れど。只板を打がぞゝ。糸ゝハ僅乃声もゑくて。何れた
ゑゝかやゝゝと打笑ひ。絶ハまゞ其琴にゆり。糸を妾がゆさゝ居ハ。眼に見え
ぞゝハゝつゝ程波が妙ゝに後ゝを音乃ゝづべき謂ゑ。障ぞ疾ひけゆる愚よ。
去年乃秋法楽妾に投のゆゝれ辛円ゝつゝるゝハゝひも出ぞ妾ゝゝ手びぞと
をゝゝぞ。孤屏をうゆーとのぞ後ゝ言ゑ脇ゝゝゝと。頓て瞿麦が膝元乃

月夜に琴を調ぶるゝ
ゑゝゝ時ゑが怨鬼
初て瞿麦を抱ゝゝと

二面乃琴を左右に拾て撲地と倒れさふ〳〵人乃手をかけ〳〵投かゞ流石大
膽なる瞿麦もあまり乃こゝふ魂きえて言へきことをもゝゞ侍女ゑいさゝふ
生さる乞ゆくふ〳〵南无仏〳〵と唱へなゞして既に奥おくとゝゆけれゞ今者乃
酒宴はまれかぎりでゝ。瞿麦も座を立あがり戦居る侍女を言てけよ。
件乃琴をとりかゝづけんとみゝに恰も雨を洒〳〵ぢ。ゆそるゝ〳〵燈火ぢ
〳〵見るに血に染〳〵手乃形糸の間よ印〳〵。水に散〳〵紅羊を畫に似ゝ
わるやとゆひてうち臣ぢ又かゝ〳〵と打笑ひ。こゝ〳〵今にゆひあゝんと。
声ハ耳乃ゝに聞者姿ハ文に〳〵もワてゝゝぢ。三国乃陰火机帳乃かげゝゝ猶
そで雲井遥に起さろけゝ。さて次乃夜らゐさ〳〵〳〵降けゝぢ又いろなる
怪支やあ〳〵んと。侍女ゞゝハ仏ゝ文に乞ゝ〳〵ぢ。瞿麦し〳〵言ふ〳〵ゝ久
徒然を慰んと。十炷香を催し拵びに嬪つ。怖〳〵ゆふを小〳〵ゝらつまれ

けるに障子さゝ〳〵とひ〳〵くを。誰さゝゝらふや と顧れど且ゝ〳〵へをめ〳〵どいつ
乃ゝふゝゝ侍女ゝゝうち文二人乃女童ゆり。妾をさゝ拵びがゝきに者ゝ人といふ。
再者ゝ熟〳〵れハ侍ゝ〳〵共小世を夫ゝ。胡蝶乗振乃両人ゝ。侍女ハ一塊と
ゝ。油ゝうかゞゝて元者ゝ者ゝ。時に時ゝの者宅上にめゝ。ゆよ胡蝶
よ乗振よ。香さゝて拵ゝ。ゝ棟本を疾きゝるべ。瞿麦初侍女ゝの棟本
にゝゝれてゆゝゝも苦し。ゝを見ゝにハ。十炷香乃ハ〳〵ゝ勝ておりしゆゝるべ。と
いへゝ。恋と者ゝ〳〵立ゆゝゝゝ

とぞ。或は観世音乃仏像を写るまわり。或は寺を額にあてゝ伏拝もあれど。
かゝる邪ある者どもゝ。ぞう神仏乃冥助あるべき。遂に棟乃自然崩拉然
と。貧て瞿麦が膝の前に落ければ。侍女共は棟木にちらし。何つゝ喚んぐ
自ら絶くに。なりぬ。式部遠くきまつて。何どいやと。炳燭を照して。見ある人
ありて。侍女とも。漸く正気つきて。めくりをくれば。崩れ。棟木もゆく。又宅上に
かゝくと。矣。吉樹魂に。貧て。おとさぬといへば。夜ふり。巷角かを。百に夜ふ
そふれければ。總て。館に。崩れ。ところ〳〵。ぐうけ。さて。次乃夜。夜ふ
月いく。いう。洗ひ。ふけれど。夜毎乃怪。陰〳〵ふ物怕し。何人。めつて。ぶ。
部。れこめ。ふをひそめ。くかりし。ぶ。夜半。ぶりに。人乃来る。けうひ。
金。の人何〳〵く。怪。ぶ。たくり。ぶ。頃日。瞿麦が。碁。をうつ。侍女。ふ。
其碁。幸に。式部。ふわ。ぶ。ぶ。を。うつ。ぶ。眠。を。覚。べ。と。庭。きに。拍子。也

くうつとこゝけれべ。ぶきを。ぶ者。式。振。ぶ。ぶ。ぶ

めるこえと共にど轟々ゝ豊にはり中。是又奇怪ゝゝ人べゝゝゝ
夜八風烈ゝゝ雲かゝりて月さへいでゞ。庭に花乃音のきこゆること。昨夜に似
たり。或八近く或八遠くゝゝゝと打笑へ声きこへ家ゆるゝゝとわなゝし既よ
夜も更さりて。風八林を倒さんばかり。庭にさへ池水より。鬼火かゝろ〳〵と燃る
姿乃彷彿ゝゝ現ゝゝ。中ゝ雲を噛て逆ゝゝ。ゝ。ゝ。

命令を畏れて迫ひしとき。言ばきとありて枕辺に家隷をよび集め。まづ西こと
涙を流。深く恨りて夫と乞ひ。氏瞿麦を苦しむる。則我妻なり。と
いふ声の時なるに異ものゝ。皆ありて又曰。妾が身乃賤きを知り。さまゝに
嘲哢す。剰鉞玄とゆゝしの医師をかゝらひ。毒薬をもりて妾を大風とす。
相公乃麗をねたゝんとゝかりしを。鉞玄が幽魂の告によりて詳に知り。氏
の氏の業を服し。少しく病やまりしかゝ瞿麦をゆゝもとづき。深旅我
国に来びきて。嫌ふ事なるべし。瞿麦が
姿を仮時なるが為乃人を。ものゝ事とまらるゝ。今の氏
いつゝ。又ある苦しと。奥ふ。瞿麦が声なり。よく今ふ氏知さん
どるへと。庭さまふ立まるを。人と周章ゆゝとどれば右左に実退ふを狂
ひ犯人て走りゆき。池乃汀に立て。畏へをさゝまねき。又時なるが声して妾

を殺害せしの氏知にぞ。あれかしこ乃ものゝ。手を打ちぬとて。指さる扇
うあけて。我とゞ死の手を徴とうてび。刃をもて。彫ごとく。鮮血さらと
潰てゆる苦しあるゝと叫び。今乃ゆゝひいふぞ。いま乃ゆゝひいふぞ。
といひつゝ池水に落り。狂ひ死にぞ亡にけり。嗚呼因果覿面乃理あれを
ゆゝの。豆恐れ慎まざるんや。又瞿麦に従ひ時なるを潮せ。邪ふる侍女を
へ。乃陳本にゝ礼しとゝくるとまるゝ。粥に痛或ハ蹇とゝ。或ハ短項とゝ。
ゝゝ悪報によりて半ゝつゝ片羽とぞゝりにける。ゝゝ後ゝ野の庄にて。
夫に人ゝゝ野辺に落乃ゆゝとゝきゝゝめり。主人畏を幻礙しゝゝ。又弦
を夜戸外に出けば時として声ありて。黄昏にかゝるゝまでゝりつゝ
ゝゝん。礼時なるが怨鬼。きぬさにこゝまゝゝ。又梶程乃まゝにゝよて
ゝゝゝ

のこ。彼地(かのち)にハのこれりと。ある翁(おきな)乃おうゝ

浅間嶽後快逢州執考譚二之巻終